



★57★

渡辺 大直

古新聞。今は物置に積み上げて廃品回収の日を待つばかりだが、昔の人はいろんなものに活用していた。

物を包んだり、箱の底や畳の下に敷いたり、折りたたんで壁の隙間に詰めたり、使い方はとても多様だ。

土蔵の掃除は埃とガラクタばかりでうんざりだが、箱の底から出てくる昔の新聞を読むのは妙に新鮮で面白い。記事の書き方が今と違い、そう感じるのかもしれない。ましてや牛の写真があったりすると嬉しくなり、腰を落ち着けて読んでしまう。

今回見つけた新聞は、昭和6年6月25日付、大阪朝日新聞神戸版。紙面の中央に、すげ笠をかぶった女性が田植えをしている写真がある。向こう隣の田んぼで

は、やはりすげ笠をかぶり、蓑を着た人が牛を追って代掻きをしているのが写っている。

見出しは「甞へる農村 淡路の田植」。「降った降った黄金の雨が、23日の日暮れから降り出して、夜もすがら24日にはひとしほ降雨量が増した。六千三百町歩もの植付不能田をもつ淡路は、このひと雨で水喧嘩も。雨乞ひソッチのけ田植のオンパレード」と記事が続く。横の記事には、明石の雨量は坪当たり5升8合8勺とある。雨が降らず田植えができなかったところに恵みの雨が降り、競争して田植えが始まった光景が浮かぶ。

調べてみると、この年の6月の降水量は神戸地方気象台が70・3ミ、豊岡特別地域気象観測所は66・6ミと平年の4割ほど。23日か

異常気象



甞へる農村

淡路の田植(きのふふし)
降った降った黄金の雨が、二十三日の日暮れから降り出して、夜もすがら二十四日はひとしほ降雨量が増した。六千三百町歩もの植付不能田をもつ淡路は、このひと雨で水喧嘩も。雨乞ひソッチのけ田植のオンパレード(写真は二十四日あさ中淡路田で寫す)

もつと

雨が欲しい
明石市郡地方
加古、明石の両市、瀬戸用水とする地方では廿三日夜来の降雨で二十四日は何れも一晝に田植を始め、明石市郡は陸路も海日來井戸からポンプで取水して各地にポンプ田植を始め、廿四日一日一晝に田植を始めた同郡の野原、降り出した雨は農夫達の熱望を際した。海日來井戸も五升八合八勺と

89年前の田植えの様子を伝える新聞

ら24日の雨で県下一斉に田植えが始まったのだらう。この年は、2月に瀬戸内沿岸に大雪が降り、姫路、明石で24センチ、淡路でも18町村が45センチ以上積雪したというのに、豊岡特別地域気象観測所の積雪量はなし。4月に村岡で桜花の上に積雪したとある。

今年も牧場公園のゲレンデに雪はない。但馬のスキー場は軒並み雪不足に悩む。地球温暖化、異常気象は近年のキーワードのように使われるが、89年前、人と牛がともに米づくりに励んだ時代にも異常気象はあった。

牛の写真を見つけたばかりにとんだ時間をつぶしてしまった。日が暮れるまでにひっそ散らかした土蔵を片付けなければならぬ。ため息をつきながら重い腰を上げて埃だらけのガラクタの片付けに取り掛かった。

■筆者プロフィール■
わたなべ・ひろなお
1954年、新温泉町浜坂出身。県職員として畜産行政に長年携わってきた。県立但馬牧場公園「但馬牛博物館」館長。